

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
評価の視点	薬理作用	相互作用 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) 併用注意	重篤な副作用のおそれ 薬理・毒性に基づくもの 特異体質・アレルギー等によるもの	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ 薬理・毒性に基づくもの 特異体質・アレルギー等によるもの	薬理に基づく習慣性	適応禁忌 慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ 適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ) 使用量に上限があるもの 適量使用・誤使用のおそれ 長期使用による健康被害のおそれ	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
局所麻酔成分 アミ/安息香酸エチル	アミ/安息香酸エチル「丸石」(内用・外用) 胃粘膜の知覚神経末梢を麻痺させ、中枢への刺激伝達を遮断して疼痛、嘔吐を鎮める。			0.1~5% (食欲不振、悪心、口渇、便秘)、0.1%未満(下痢、メトヘモグロビン血症(小児)) 頻度不明(過敏症)		本剤過敏症既往歴 乳幼児(内用・坐剤の場合)	高齢者、妊婦又は妊娠の可能性	(内用) 口内にしびれ等を残さないため速やかに飲み下す (外用) 眼には使用しないこと[軟膏・液剤の場合]、誤って吸入しないこと[散布剤の場合]		(内用) 1日0.6~1g、3回分服。適宜増減。高齢者は減量 (外用) 通常、5~15%の軟膏剤、液剤、散布剤として、または、1箇中200mg~300mgを含有する坐剤として適宜患部に使用する	(内用) 下記疾患に伴う疼痛・嘔吐、胃炎、胃潰瘍(外用) 下記疾患における鎮痛・鎮痙・外傷、皮膚潰瘍、掻痒症、痔疾
局所麻酔成分 塩酸ジブカイン	ペルカミン注表面麻酔に類似のため使用 感覚・求心神経繊維のNa ⁺ チャンネルを遮断することにより局所麻酔作用を発現する。効力、持続性、毒性いずれも最大級の局所麻酔薬であるが、より効力を強めるために局所鎮痛以外の目的にはエピネフリンを添加して用いる		振盪、嘔吐等の中毒症状(頻度不明) ショック(頻度不明)	頻度不明(眠気、不安、興奮、霧視、眩暈、悪心・嘔吐等) 頻度不明(過敏症)		本剤に対し過敏症の既往歴	本人又は両親、兄弟に気管支喘息、発疹、蕁麻疹等のアレルギー反応を起こしやすい体質。高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人。			使用に際し、目的濃度の水性注射液または水性液として使用する。 ただし、年齢、麻酔領域、部位、組織、症状、体質により適宜増減する。 仙骨麻酔 0.05~0.1%注射液にエピネフリンを添加したものをを用い、塩酸ジブカインとして、通常成人10~30mgを使用する。 (基準最高用量:1回40mg) 0.05~0.1%注射液にエピネフリンを添加したものをを用い、塩酸ジブカインとして、通常成人3~40mgを使用する。 浸潤麻酔 (基準最高用量:1回40mg) 0.05~0.1%注射液にエピネフリンを添加したものをを用い、塩酸ジブカインとして、通常成人1~40mgを使用する。 表面麻酔 ・耳鼻咽喉科領域の粘膜麻酔には、1~2%液にエピネフリンを添加したものをを用い、噴霧または塗布する。 ・眼科領域の麻酔には、0.05~0.1%液にエピネフリンを添加したものをを用い、通常成人には1~5滴を点眼する。 ・尿道粘膜麻酔には、	仙骨麻酔、伝達麻酔、浸潤麻酔、表面麻酔、歯科領域における伝達麻酔・浸潤麻酔

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化			
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ			薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)			使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に関するもの
評価の視点			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの										
																		0.1%液にエピネフリンを添加したものを、塩酸ジブカインとして、通常成人男子10~20mg、女子3~7mgを使用する。 ・膀胱粘膜麻酔には、0.025~0.05%液にエピネフリンを添加したものを、通常成人10~20mgを使用する。 ・局所鎮痛には、0.025~0.05%液を用い、適量を使用する。 ・歯科領域麻酔 0.1%注射液にエピネフリンを添加したものを、伝達麻酔・浸潤麻酔には塩酸ジブカインとして、通常成人1~2mgを使用する。

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化					
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	濫用に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が 発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ		
局所麻酔成分	塩酸プロカイン 塩酸プロカイン注「ホエイ」 局所麻酔に類似のため使用	合成局所麻酔薬の原型であり、感覚・求心神経線維のNa ⁺ チャネルを遮断し、活動電位の伝導を抑制することにより局所麻酔作用を発現する。粘膜への浸透性が悪いので表面麻酔としては無効である。代謝産物が血管拡張作用を有し、速やかに吸収されるのでエピネフリンの添加が必要である。		痙攣、痺れ、嘔吐、昏倒、呼吸抑制、ショック(頻度不明)	ショック(頻度不明)	頻度不明(嘔吐、不安、興奮、霧視、めまい、悪心・嘔吐、メトヘモグロビン血症)	頻度不明(過敏症)	重篤な出血やショック状態(脊髄、硬膜外麻酔時：症状が悪化)、注射部位またはその周辺に炎症(脊髄、硬膜外麻酔時：効果が急激に発現)、敗血症の患者(脊髄、硬膜外麻酔時：敗血症性の髄膜炎がおこるおそれ)、メトヘモグロビン血症(脊髄麻酔を除く)(症状が悪化するおそれ)、本剤または安息香酸エステル(コカインを除く)系局所麻酔薬に対し過敏症の既往歴	高齢者、妊婦または妊娠している可能性のある婦人、妊娠末期の婦人				使用に際し、目的濃度の水性注射液として使用する。脊髄麻酔(腰髄麻酔) 5~10%注射液とし、通常、成人には塩酸プロカインとして、低位麻酔には50~100mg、高位麻酔には150~200mgを使用する。硬膜外麻酔 (基準最高用量：1回 600mg) 1.5~2%注射液とし、通常、成人には塩酸プロカインとして、200~400mgを使用する。伝達麻酔 1~2%注射液とし、通常、成人には塩酸プロカインとして、10~400mgを使用する。浸潤麻酔 (基準最高用量：1回 1,000mg) 0.25~0.5%注射液とし、通常、成人には塩酸プロカインとして、1回 1,000mgの範囲内で使用する。歯科領域麻酔 2%注射液にエピネフリンを添加したものをを用い、伝達麻酔、浸潤麻酔には、通常、成人には塩酸プロカインとして、10~100mgを使用する。ただし、年齢、麻酔領域、部位、組織、症状、体質により適宜増減する。必要に応じエピネフリン(通常濃度1:10万~20万)を添加して使用する。	脊髄麻酔(腰髄麻酔)、硬膜外麻酔、伝達麻酔、歯科領域における伝達麻酔、浸潤麻酔
リドカイン	キシロカイン液「4%」 表面麻酔に類似のため使用	神経線のナトリウムチャネルをブロックし、神経における活動電位の伝導を可逆的に抑制し、知覚神経及び運動神経を遮断する局所麻酔薬である。表面・浸潤・伝達麻酔効果は、塩酸プロカインよりも強く、作用持続時間は塩酸プロカインよりも長い。		意識障害、痙攣、痙攣(頻度不明)	ショック(頻度不明)	頻度不明(眼瞼、不安、興奮、霧視、眩暈、悪心・嘔吐)	頻度不明(過敏症)	本剤の成分又はアミド型局所麻酔薬に対し過敏症の既往歴。	高齢者又は全身状態が不良。心刺激伝導障害。重症の肝機能障害又は腎機能障害。幼児。妊婦又は妊娠している可能性のある婦人。		過量投与で中毒症状が現れる。症状として中枢神経系(不安、興奮、意識消失、全身痙攣など)、心血管系(血圧低下、徐脈、循環虚脱など)が現れる。眼科(点眼)用として使用しないこと。注射用として使用しない。		塩酸リドカインとして、通常成人では80~200mg(2~5mL)を使用する。なお、年齢、麻酔領域、部位、組織、体質により適宜増減する。幼児(特に3歳以下)では低用量から投与を開始。	表面麻酔

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化					
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づ く留意性	適応禁忌	症状の悪化 につながるお それ	使用法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果			
		併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ			
抗炎症成分	塩化リゾチー ム レフトーゼ錠	抗炎症作用・ 瘢痕形成・組 織修復作用: 膿液の分解 と排出作用 出血抑制作用			ショック、アナ フィラキシー 様症状・SJ症 候群・Lyell 症候群(頻度 不明)	0.1~5%未 満(下痢、胃 部不快感、悪 心・嘔吐、食 欲不振)、 0.1%未満(口 内炎等)、頻 度不明(肝機能 障害 (AST(GOT)、 ALT(GPT)、 Al-P、γ- GTP、LDHの 上昇等、めま い)	0.1%未満(過 敏症)				作用機序は 解明されてい ない点も多 く、用量・効 果の関係も 必ずしも明ら かにされてい ないので、漫 然と投与しな い。	1慢性副鼻腔炎の腫脹の 融解、痰の切れが悪く、喀 回数が多い気管支炎、 気管支喘息、気管支拡張 症の喀痰排出困難、小 手術時の術中術後出血の 場合、通常、成人は1日塩化 リゾチームとして、60~ 270mg(力価)を3回に分 けて経口投与する。2歯槽膿 瘍(炎症型)腫脹の融解 の場合、通常、成人は1日 塩化リゾチームとして、180 ~270mg(力価)を3回に分 けて経口投与する。高齢 者減量	1慢性副鼻腔 炎の腫脹の融 解、痰の切れ が悪く、喀回数 が多い気管支 炎、気管支 拡張症の喀痰 排出困難、小 手術時の術中 術後出血(歯 科、泌尿器科 領域)の場合 2歯槽膿瘍 (炎症型)腫脹 の融解の場合	
	グリチルリチ ン酸	軟膏のみな ので、グリチ ルリチン酸 モノアンモニ ウム(グリチ ロン注一号) を使用	抗炎症作用		ループ利尿剤・チアジド系 およびその類似降圧利尿剤 (低カリウム血症)、甘草(偽 アルドステロン症)	偽アルドステ ロン症(頻度 不明)、横紋 筋溶解症(グ リチルリチ ン酸または甘 草を含有する 製剤)		偽アルドステ ロン症、ミオパシー、低 カリウム血症(低カ リウム血症、高血 圧症等を悪化)			高齢者、妊婦小児 等	長期連用に よる偽アルド ステロン症	グリチルリチンとして、通 常成人1日1回40mgを皮 下注射する。なお、年齢、症 状により適宜増減する。	薬疹
抗炎症成分	酢酸ヒドロ コルチゾン	コートリル錠 外用痔疾用 薬なのでヒド ロコルチゾン の内服で代 用	抗炎症・抗ア レルギー作用 を示す糖質副 腎皮質ホルモン である。副 腎摘出ラットの 肝に対する 本薬の糖原 増加作用はコ ルチゾンの約 1.5倍であり、 ラット線球肉 芽腫に対する 抗炎症作用 はコルチゾン の約1.3倍で ある。 ヒドロコルチ ゾンの糖質副 腎皮質ホルモ ンとしての作 用は弱く、副 腎摘出イヌに 対する生命維 持作用はデ オキシコルチ コステロンの 約0.04倍であ る。	バルビツール酸誘導体・フェ ニトイン・リファンピシン(代謝 が促進されることにより本剤 の作用が減弱)、サリチル酸 誘導体(これらの薬剤との併 用時に本剤を減量すると血 清中のサリチル酸誘導体の 濃度が増加し、サリチル酸中 毒)、抗凝血剤(これらの薬剤 の作用を減弱)、経口糖尿病 薬(これらの薬剤の作用を減 弱)、利尿剤(カリウム保持 性利尿剤を除く)(低カリウム 血症)	感染症、統 発性副腎皮 質機能不全、 糖尿病、消 化性潰瘍、骨 粗鬆症、大 腿骨及び上 腕骨等の骨 髄性壊死、 ミオパシー、 線内障、後 囊白内障、 血圧症(頻 度不明)	頻度不明(月 経異常、経 閉、下痢、悪 心・嘔吐、胃 痛、胸やけ、 腹部膨満感、 口渇、食欲 亢進、精神 不安、うつ 状態、多幸 症、不眠、 頭痛、眩暈、 痙攣、痙攣、 筋肉痛、関 節痛、満月 様顔貌、野 牛肩、窒素 平衡、脂肪 肝、浮腫、 血圧上昇、 低カリウム 性アルカ ロシス、中 心性漿液性 網脈絡膜病 等による網 膜剥離、眼 球突出、白 血球増多、 多毛、色素 沈着、皮下 注	頻度不明(過 敏症)	本剤の成分に 対し過敏症 の既往歴 原則禁忌 有効な抗生 剤の存在 しない感 染症、結 核性疾患、 単純疱疹 性角膜炎(感 染症を増悪 させるお それ)、消 化性潰瘍 (潰瘍を増 悪させる おそれ)、 精神病 (精神病を 増悪させ るおそれ)、 後囊白 内障の患 者(白内 障を増悪)、緑内 障(眼圧を 上昇)、 高血圧(血 圧を上 昇)、電解 質異常 (低カリウ ム血症 等)、血 栓症(血 栓症を増 悪させる おそれ)、 最近行 った内 臓の手術 創傷治癒 を障害さ せるお それ、急 性心筋 梗塞(心 破裂)	水痘又は麻 疹の既往 のない患 者にお いては、 水痘又は 麻疹への 感染を 予防する ために十分 な配慮を 行うこと。		連用後、投 与を急に 中止する と、ときに 離脱症状 があらわ れること があるので 、徐々に 減量する など慎重 に行なう こと。	高齢者へ の長期投 与:感染症 の誘発、 糖尿、骨 粗鬆症、 高血圧 症、後囊 白内障、 緑内障等 の副作用 発現。 小児への 長期投 与:頭蓋 内圧亢進 症状	通常、成人にはヒドロコ ルチゾンとして1日10~ 120mgを1~4回に分けて 経口投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。	1慢性副腎皮 質機能不全 (原発性、続 発性、下垂 体性、医 源性)、急性 副腎皮質機 能不全(副 腎クラー ーゼ)、副 腎性器症候 群、亜急性 甲状腺炎に 伴う急性眼 球突出症、 ACTH単 独欠損症 2慢性関節 リウマチ、 若年性関 節リウマチ (ステロ イドを 含む)、リ ウマチ熱 (リウマチ 性心炎を 含む) 3エリテ マトー デス(全 身性及び 慢性内 臓)、全 身性血 管炎(大 動脈 炎候群、 結 節性 動脈周 固

外用持疾用薬

製品群NO. 30

ワークシートNO. Z3

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	薬理作用	相互作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上	過量使用・誤使用のおそれ		
																		炎、多発性動脈炎、ウェゲナ肉芽腫症を含む)、多発性筋炎(皮膚筋炎)、強皮症 4.ネフローゼ及びネフローゼ症候群 5.気管支喘息、薬剤その他の化学物質によるアレルギー、中毒(薬疹、中毒疹を含む)、血清病 6.重症感染症(化学療法と併用する) 7.溶血性貧血(免疫性又は免疫性機序の疑われるもの)、白血病(急性白血病、慢性骨髄性白血病の急性転化、慢性リンパ性白血病)(皮膚白血病を含む)、顆粒球減少症(本態性、続発性)、紫斑病(血小板減少性及び血小板非減少性)、再生不良性貧血 8.限局性腸炎、潰瘍性大

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
		相互作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)					
評価の視点	薬理作用	相互作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
																			腸炎 9.重症消耗性疾患の全身状態の改善(癌末期、スプルーを含む) 10.慢性肝炎(活動型、急性再燃型、胆汁うっ滞型)(但し、一般的治療に反応せず肝機能の著しい異常が持続する難治性のものに限る)、肝硬変(活動型、難治性腹水を伴うもの、胆汁うっ滞を伴うもの) 11.サルコイドーシス(但し、両側肺門リンパ節腫脹のみの場合を除く) 12.肺結核(粟粒結核、重症結核に限る)(抗結核剤と併用する)、結核性胸膜炎(抗結核剤と併用する)、結核性腹膜炎(抗結核剤と併用する)、結核性心臓炎(抗結核剤と併用する)

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	評価の視点	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果		
		薬理作用	相互作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌		慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ				スイッチ化等に伴う使用環境の変化	
																						13.脳脊髄炎(脳炎、脊髄炎を含む)(但し、一次性脳炎の場合は頭蓋内圧亢進症状がみられ、かつ他剤で効果が不十分なときに短期間用いること)、末梢神経炎(ギランバレー症候群を含む)、筋強直性硬直症(視束脊髄炎を含む)、小舞蹈病、顔面神経麻痺、脊髄嚢腫、網膜炎 14.悪性リンパ腫(リンパ肉腫症、細網肉腫症、ホジキン病、皮膚細胞癌、菌状癌肉腫)及び類似疾患(近縁疾患)、好酸性肉芽腫、乳癌の再発転移 15.特発性低血糖症 16.原因不明の発熱 17.副腎摘除、副腎皮質機能不全患者に対する外科的侵襲 18.蛇毒・昆虫毒(重症の虫さされを含む) 19.卵管整形術後の癒着防止 20.*湿疹・皮膚炎群(急性湿疹、亜急性湿疹、慢性湿疹、接触皮膚炎、貨幣状湿疹、自家感受性皮膚炎、アトピー皮膚炎、乳・幼・小児湿疹) 21.内眼・視神経 22.急性・慢性中 23.難治性口内 *印の附されて

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 薬用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ 化等に伴う使用環境 の変化	用法用量	機能効果		
	評価の視点	薬理作用	相互作用	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ			長期使用に よる健康被害 のおそれ	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化
抗炎症成分	酢酸プレドニ ゾン	プレドネマ注 腸20mg(酢 酸プレドニ ゾンがない ためリン酸 プレドニゾ ンで代用)	ラットの膀胱 内酢酸注入 潰瘍性大腸 炎モデルに 対し、リン酸 プレドニゾ ン0.3mg/kg、 0.1mg/kgの注 腸投与にて有 意な潰瘍面 積の縮小効果 が認められた	併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意 バルビツール誘導体(フェ ノバルビタール)・フェニト イン・リファンピシン(本剤の作 用が減弱)、サリチル酸誘導 体(併用時に本剤を減量す ると、血清中のサリチル酸誘 導体の濃度が増加し、サリチ ル酸中毒)、抗凝血剤(抗凝血 剤の作用を減弱)、経口糖尿 病用剤・インスリン製剤(これ らの薬剤の作用を減弱)、利 尿剤(カリウム保持性利尿剤 を除く)(併用により、低カリウ ム血症)、活性型ビタミンD3 製剤(高カルシウム血症、尿 路結石があらわれる)、シク ロスポリン(副腎皮質ホルモ ン剤の大量投与により、併用 したシクロスポリンの血中濃 度が上昇)、マクロライド系抗 生物質(副腎皮質ホルモ ン剤で、作用が増強)	誘発感染症、 感染症の増 悪、続発性副 腎皮質機能 不全、糖尿 病、消化管潰 瘍、消化管穿 孔、消化管出 血、痔瘻、精 神変調、うつ 状態、痙攣、 骨粗鬆症、大 腿骨及び上 腕骨等の骨 頭無菌性壊 死、ミオパ シー、緑内 障、後蓋白 障、中心性漿 液性網脈絡 膜症、多発性 後極部網膜 色素上皮症、 血栓症、心筋 梗塞、脳梗 塞、動脈瘤 (頻度不明)	特異体質・ア レルギー等 によるもの アナフィラキ シー様反応、 喘息発作(頻 度不明)	頻度不明(月 経異常、下 痢、悪心・嘔 吐、胃痛、胸 やけ、腹部膨 満感、口渇、 食欲不振、食 欲亢進、多幸 感、不眠、頭 痛、めまい、 筋肉痛、関節 痛、満月様顔 貌、野牛臍、 窒素負平衡、 脂肪肝、浮 腫、血圧上 昇、低カリウ ム性アルカ ロシス、網 膜障害、眼球 突出、白血球 増多、ざ瘡、 脱毛、色素 沈着、皮下 出血、紫 斑、線条、そ う痒、発汗異 常、顔面紅 斑、創傷治癒 障害、皮膚菲 薄化・脆弱 化、脂肪壊 死、発熱、疲 労感、ステロ イド腎症、体 重増加、精子 数及びその 運動性の増 減、尿路結 石)、高齢者: 長期投与時 に感染症の 誘発、糖尿 病、骨粗鬆 症、高血圧 症、後のう 白内障、緑内 障、小児:発 育抑制、頭蓋 内圧亢進症 状や高血圧 性脳症。神経 障害・抗体反 応の欠如(副 腎皮質ホル モン剤を投与 中の患者に ワクチン(種 痘等)を接種 した場合)。			禁忌:本剤の成分 に対し過敏症の既 往歴 原則禁忌: 1.有効な抗菌剤の 存在しない感染 症、全身の真菌症 (感染症が増悪す るおそれ) 2.消化性潰瘍(消 化性潰瘍が増悪 するおそれ) 3.精神病(精神病 が増悪するおそれ) 4.結核性疾患(結 核性疾患が増悪 するおそれ) 5.単純疱疹性角 膜炎(単純疱疹性角 膜炎が増悪するお それ) 6.後蓋白内障(後 蓋白内障が増悪 するおそれ) 7.緑内障(緑内障 が増悪するおそれ) 8.高血圧症(高血 圧症が増悪するお それ) 9.電解質異常(電 解質異常が増悪 するおそれ) 10.血栓症(血栓症 が増悪するおそれ) 11.最近行った内 臓の手術(創傷 治癒を遅延するお それ) 12.急性心筋梗塞 (心破裂)	感染症、糖尿病、 骨粗鬆症、腎不 全、甲状腺機能低 下、肝硬変、脂肪 肝、脂肪蓄積症、 重症筋無力症、高 齢者、薬物、食物、 添加物等に過敏な 喘息患者、妊婦又 は妊娠している可 能性のある婦人、 授乳婦	水痘又は麻疹 の既往のない患者 に、水痘又は麻疹 への感染を 極力防ぐよう 常に十分な 配慮と観察を 行うこと。	運用法(誤使用のおそれ)	使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ	高齢者に長 期投与した 場合:感染症 の誘発、糖尿 病、骨粗鬆 症、高血圧 症、後蓋白 内障、緑内障 等の副作用が あらわれやす い。	通常、成人は、1回量リン 酸プレドニゾンナトリウ ムとして22mg(リン酸プレド ニゾンとして20mg)を注 腸投与(直腸内注入)す る。なお、年齢、症状によ り適宜増減する。	潰瘍性大腸 炎、限局性腸 炎

外用特疾用薬

薬価研IVU. 3U

ノゾノドIVU. 2U

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	I ノゾノドIVU. 2U 用法用量	J 効能効果					
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ		薬理に基づ く習慣性		適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ				適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ		薬理に基づ く習慣性		適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			用法用量	効能効果			
		併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの							使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ					
鎮 痒 成 分	塩酸ジフェン ヒドรามミン	ベナ錠	抗ヒスタミン 作用: H1受容体 に対しヒスタミン と競合的に拮 抗すること により作用を あらわす。 ヒスタミン遊 離抑制作用	アルコール・中枢神経抑制 剤・MAO阻害剤(中枢神経抑 制作用が増強)、抗コリン作 用を有する薬剤(抗コリン作 用が増強)		頻度不明(口 渴、悪心・嘔 吐、下痢、め まい、倦怠 感、神経過 敏、頭痛、眠 気) 自動車の運 転等危険を 伴う機械の 操作	頻度不明(過 敏症)			緑内障(悪化)、前 立腺肥大等下部 尿路に閉塞性疾 患(悪化)	授乳中の婦人、未 熟児、新生児、妊 婦又は妊娠して いる可能性のある婦 人、高齢者							塩酸ジフェンヒドรามミンと して、通常成人1回30~ 50mg(3~5錠)を1日2~3 回経口投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。	蕁麻疹、皮膚 疾患に伴うそう 痒(湿疹、皮膚 炎)、枯草熱、 アレルギー性 鼻炎、血管運 動性鼻炎、急 性鼻炎、春季 カタルに伴うそ う痒		
鎮 痒 成 分	クロタミ ン	オイラックス	本剤は抗ヒ スタミン作用 を示さないこと 、またヒトの皮 膚感覚のうち そう痒感を抑 制するが、他 の皮膚感覚 には影響を 与えないこと などから、抗 ヒスタミン 剤、局所麻酔 剤とは作用機 序を異にす ると考えら れる。一般に は、皮膚に 軽いしゃく 熱感を与 え、温覚に 対するこの 刺激が競合 的にそう痒 感を消 失させると いわれている。			0.1~5%未 満(熱感・し やく熱感、刺 激症状(ピ リピリ感、 ひりひり 感等)、発 赤、発赤増 強、紅斑増 強、分泌物 増加、濃潤 傾向)	5%以上(過 敏症)			本剤に対して過 敏症の既往歴	・高齢者・妊婦又は 妊娠の可能性の ある婦人への 大量又は長 期にわたる 広範囲の使 用、乳幼児・ 小児に対する 広範囲の使 用							・眼あるいは眼 周囲及び粘 膜には使 用しない。 ・塗布直後、 軽い熱感 を生じること があるが、 通常短時間 うちに消 失する。	・高齢者、妊婦 又は妊娠して いる可能性 のある婦人 には、大量・ 長期にわた る広範囲の 作用は避け る。	通常、症状により適量を1 日数回患部に塗布又は塗 擦する。 ・高齢者・妊婦又は妊娠の 可能性のある婦人:大量 かつ広範囲の使用は避け る。	湿疹、蕁麻疹、 神経皮膚炎、 皮膚そう痒症、 小児ストロフル ス

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化) につながるおそれ		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効果効果	
	評価の視点	薬理作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ 薬理・毒性に基づくもの	重篤な副作用のおそれ 特異体質・アレルギー等によるもの	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ 薬理・毒性に基づくもの	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ 特異体質・アレルギー等によるもの	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の 症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ) 使用量に関するもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			スイッチ化等に伴う使用環境の変化
	d-マレイン酸クロルフェニラミン	ポラミン錠 2mg 抗ヒスタミン作用		中枢神経抑制剤・アルコール・MAO阻害剤・抗コリン作用を有する薬剤(相互に作用を増強)、ドロキシドパ、ノルエピネフリン(血圧の異常上昇)	痙攣・錯乱・再生不良性貧血・無顆粒球症(頻度不明)	ショック(頻度不明)	5%以上又は頻度不明(鎮静・神経過敏、頭痛、焦燥感、複視、眩暈、不眠、めまい、耳鳴、前庭障害、多幸症、情緒不安、ヒステリー、振戦、神経炎、協働異常、感覚異常、霧視、口渇、胸やけ、食欲不振、悪心、嘔吐、腰痛、便秘、下痢、頻尿、排尿困難、尿閉等低血圧、心悸亢進、頻脈、期外収縮、鼻及び気道の乾燥、気管分泌液の粘性化、喘鳴、鼻閉、溶血性貧血、肝機能障害(AST(GOT)・ALT(GPT)・Al-Pの上昇等)、悪寒、発汗異常、疲労感、胸痛、月経異常、0.1%未満(血小板減少)、眠気を催すことがあるので自動車の運転等危険を伴う機械の操作			本剤の成分又は類似化合物に対し過敏症の既往歴、緑内障(緑内障の増悪)、前立腺肥大等下部尿路に閉塞性疾患(症状の増悪)、低出生体重児・新生児(痙攣等の重篤な反応があらわれるおそれ)								d-マレイン酸クロルフェニラミンとして、通常、成人には1回2mgを1日1~4回経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	じん麻疹、血管運動性浮腫、枯草熱、皮膚疾患に伴うそう痒(湿疹・皮膚炎、皮膚そう痒症、薬疹)、アレルギー性鼻炎、血管運動性鼻炎、感冒等上気道炎に伴うくしゃみ・鼻汁
止血成分	塩酸テトラヒドロゾリン	ABCスプレー 点鼻薬、塩酸塩がなく、硝酸塩	直接局所粘膜に適用すれば粘膜の充血、腫脹を除去する。血圧上昇作用はエピネフリンと類似であり、作用の発現はエピネフリンより遅い。	モノアミン酸化酵素阻害剤(急激な血圧上昇)			頻度不明(傾眠、頭痛、めまい、振戦、不眠症、脱力感、血圧上昇、心悸亢進、不整脈、熱感、刺激痛、乾燥感、反応性充血、鼻漏、長期使用での反応性の低下等)	頻度不明(過敏症)		・本剤に対し過敏症の既往歴 ・2歳未満の幼児・乳児(全身症状) ・モノアミン酸化酵素阻害剤を投与中(急激な血圧上昇)	冠動脈疾患、高血圧症、甲状腺機能亢進症、糖尿病、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、小児	適用又は頻回使用により反応性の低下や局所粘膜の二次充血を起すことあるので、急性充血期に限って使用するか又は適切な休薬期間をおいて使用すること。		適用又は頻回使用により反応性の低下や局所粘膜の二次充血を起すことある。小児において、過量投与により、発汗、徐脈、昏睡等の全身症状があらわれやすい。眼科用として使用しないこと。				本剤は原則として6歳以上の小児及び成人に用いる。通常、成人3~5時間毎に2~3回鼻腔内に噴霧するか、又は2~4滴を鼻腔内に点鼻する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	上気道の諸疾患の充血・うっ血

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化				
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果
止血成分	塩酸ナファゾリン 0.05%ブリビ ナ液「チ バ」、塩酸塩 なく硝酸塩	血管平滑筋 のα-アドレ ナリン受容体 に直接作用し て血管を収縮 させる。 アドレナリン より強い末梢 血管収縮作 用を有し、作 用持続時間も 長い(ウサギ 耳殻血管)。	MAO阻害薬 (急激な血圧 上昇)	頻度不明 (眼気等の鎮 静作用(特に 小児)、神経 過敏、頭痛、 めまい、不眠 症、血圧上 昇、悪心・嘔 吐、熱感、刺 激痛、乾燥 感、嗅覚消 失、反応性充 血、長期投与 で顆粒球減少 ・反応性の 低下)	頻度不明(過 敏症)		冠動脈疾患、高血 圧症、甲状腺機能 亢進症、糖尿病、 交感神経作用薬に よる不眠・めまい などの既往、妊婦 又は妊婦している可 能性のある婦人、 小児	薬用又は頻 回使用により 反応性の低 下や局所粘 膜の二次充 血を起こすこ とがあるので、 急性充血期 に限って使用 するか又は 適切な休薬 期間をおいて 使用すること。		眼科用として使 用しないこと。 適量投与により、 主な全身作用と して、血圧上昇と 二次作用として 臓器虚血がみら れる。 幼・小児では過 量投与により、顕 著な鎮静があら われ、発汗、徐 脈、昏睡等の全 身症状があらわ れやすい。薬用・ 頻回投与により 顆粒球減少、反 応性の低下、局 所粘膜の二次充 血を起こすこと がある。	通常、成人鼻腔内には、1 回2～4滴を1日数回、咽 頭・喉頭には1回1～2mL を1日数回塗布又は噴霧 する。なお、年齢、症状に より適宜増減する。 局所麻酔剤への添加に は、局所麻酔剤1mLあた り0.05%液2～4滴の割合 で添加する。	上気道の痔疾 患の充血・うっ 血 上気道粘膜の 表面麻酔時に おける局所麻 酔剤の効力持 続時間の延長	
	dl-塩酸メチ ルエフェドリン	アドレナリン 作動性の気 管支拡張作 用と中枢性鎮 咳作用を示 す。	MAO阻害剤・甲状腺製剤(作 用が増強)、キサンチン誘導 体・ステロイド剤・利尿剤(血 清カリウム値が低下)	頻度不明(熱 感)、0.1～ 5%未満(心 悸亢進、顔面 蒼白等、頭 痛、不眠、め まい、眼気、 神経過敏、疲 労等、悪心、 食欲不振、腹 部膨満感等、 口渇)	頻度不明(過 敏症)、		甲状腺機能亢進 症、高血圧症、心 疾患、糖尿病、高 齢者、妊婦又は妊 婦している可能性 のある婦人、授乳 中の婦人、小児 等、重症喘息(血清 カリウム低下)			過度に使用を続 けた場合、不整 脈、場合によっ ては心停止を起 すおそれがある		dl-塩酸メチルエフェドリン として、通常成人1回25～ 50mgを1日3回経口投与す る。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。一般に高齢 者では生理機能が低下し ているので減量するなど注 意すること。	下記疾患に伴 う咳嗽 気管支喘息、 感冒、急性気 管支炎、慢性 気管支炎、肺 結核、上気道 炎(咽喉頭炎、 鼻カタル) 等麻疹、湿疹
	酸化亜鉛 「エビス」	皮膚のたん 白質と結合し て被膜を形成 し、収れん、 消炎、保護並 びに緩和な防 腐作用を現 す。また、浸 出液の吸収 及び分泌抑 制により、創 面又は潰瘍 面などを乾燥 させる。		頻度不明(発 疹、刺激感)	頻度不明(過 敏症)		・本剤に対し過敏 症の既往歴のある 患者 ・重篤または広範 圍の熱傷・患部が 湿潤している場所 (組織修復を遅延) ・患部が湿潤し ている場所(組織修 復を遅延)			眼には使用しな いこと。吸入し ない。		外用剤(散布剤)として1 5～100%、軟膏剤・液剤 (懸濁剤・リニメント剤・ ローション剤等)として2～ 60% 上記濃度に調整し、いず れも症状に応じ1日1～数 回患部に適用する。	効能・効果軽 度の皮膚病変 の収れん・消 炎・保護・緩和 な防腐

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果			
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ			適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化
評価の視点		併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		
抗 菌 成 分	イソプロピル メチルフェ ノール	フェノール 歯科用では ない	本剤は、使用 濃度において グラム陽性 菌、グラム陰 性菌、結核菌 には有効であ るが、芽胞 (炭疽菌、破 傷風菌等)及 び大部分の ウイルスに対 する効果は期 待できない。				頻度不明(過 敏症)		・損傷皮膚及び粘 膜(吸収され中毒 症状発現)			・原液または濃 厚液が皮膚に付 着した場合には 腐蝕及び吸収さ れ、中毒症状を 起こすことがあ る。眼に入らな いように注意す ること。・本剤は必ず 希釈し、濃度に 注意して使用す ること。・炎症ま たは易刺激性の 部位に使用する 場合には、濃度 に注意して正常 の部位に使用す るよりも低濃度と することが望まし い。 ・外用にのみ使 用すること。 ・密封包装、ギブ ス包装、パックに 使用すると刺激 症状及び吸収さ れ、中毒症状が あらわれるので、 使用しないこ と。・長期間また は広範囲に使用 しないこと。[吸 収され、中毒症 状を起こすおそ れがある。]・旗 敷を避けるため、 保管及び取扱い には十分注意す ること。	長期間に使用 しないこと。 (吸収され、中毒症状 の発現のお それ。)	効能・効果 用法・用量(本 品希釈倍率) ・手指・皮膚の消毒:フェ ノールとして1.5~2%溶液 を用いる。(50~67倍) ・医療用具、手術室・病室 ・家具・器具・物品などの消 毒:フェノールとして2~ 5%溶液を用いる。(20~ 50倍) 排泄物の消毒:フェノール として3~5%溶液を用い る。(20~33倍) 下記疾患の鎮痒 液: フェノールとして1~2%溶 液を用いる。(50~100倍) 軟膏:フェノールとして2~ 5%軟膏を用いる。(20~ 50倍)		

外用持疾用薬

発口石 INU, JU

7/7 INU, JU

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 蓋用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				スイッチ化等に伴う使用環境の変化
評価の視点		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意		薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
抗菌成分	塩酸クロルヘキシジン	5%ピピテン液、グルコン酸塩を使用	抗菌作用: グラム陽性菌には低濃度でも迅速な殺菌作用を示す。グラム陰性菌には比較的 low 濃度で殺菌作用を示すが、グラム陽性菌に比べ抗菌力が弱くみられる。芽胞形成菌の芽胞には効力を示さない。結核菌に対して水溶液では静菌作用を示し、アルコール溶液では迅速な殺菌作用を示す。真菌類の多くに抗菌力を示すが、全般的に細菌よりも抗菌力は弱い。ウイルスに対する効力は確定していない。 作用機序は十分には解明されていないが、比較的 low 濃度では細菌の細胞膜に障害を与え、細胞質成分の不可逆的漏出や酵素阻害を起こし、比較的高濃度では細胞内の蛋白質や核酸の沈着を起こすことが報告されている。			ショック(0.1%未満)	0.1%未満(過敏症)		クロルヘキシジン製剤に対し過敏症の既往歴 脳、腎臓、耳(内耳、中耳、外耳)(難聴、神経障害) 腫、膀胱、口腔等の粘膜面(ショック症状) 眼 産婦人科用(膈・外陰部の消毒等)、泌尿器科用(膀胱・外陰部の消毒等)	薬物過敏症の既往歴 喘息等のアレルギー疾患の既往歴、家族歴			外用にのみ使用する 眼に入らないよう注意する。産婦人科用(膈・外陰部)、泌尿器科(膀胱・外陰部)には使用しないこと。創傷部位に使用する希釈液は調製後減菌する。本剤は必ず希釈し温度に注意して使用			①0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈) (通常時:0.1%水溶液(30秒以上) 汚染時:0.5%水溶液(30秒以上)) ②0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)又は0.5%エタノール溶液(本剤の10倍希釈) (0.5%エタノール溶液) ③0.05%水溶液(本剤の100倍希釈) (0.05%水溶液) ④0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)又は0.5%エタノール溶液(本剤の10倍希釈) (通常時:0.1%水溶液(10~30分) 汚染時:0.5%水溶液(30分以上)) 緊急時:0.5%エタノール溶液(2分以上)) ⑤0.05%水溶液(本剤の100倍希釈) (0.05%水溶液)	本品は下記の濃度(グルコン酸クロルヘキシジンとして)に希釈し、水溶液又はエタノール溶液として使用する。 効能・効果 用法・用量 (使用例) ①手指・皮膚の消毒 ②手術部位(手術野)の皮膚の消毒 ③皮膚の創傷部位の消毒 ④医療用具の消毒 ⑤手術室・病室・器具・器具・物品等の消毒
	セトリミド	なし															
創傷治癒促進成分	アラントイン	なし															

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				スイッチ化等に伴う使用環境の変化
評価の視点		薬理作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
血行改善成分	酢酸トコフェロール	ビタミンE:ユベラ錠					0.1~5%未満(便秘、胃部不快感)、0.1%未満(下痢)	0.1%未満(過敏症)							末梢循環障害や過酸化脂質の増加防止の効能に対して、効果がないのに月余にわたって漫然と使用すべきではない。	錠剤通常、成人には1回1~2錠(酢酸トコフェロールとして、50~100mg)を、1日2~3回経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	1. ビタミンE欠乏症の予防及び治療 2. 末梢循環障害(間歇性跛行症、動脈硬化症、静脈血栓症、血栓性静脈炎、糖尿病性網膜症、凍瘡、四肢冷感症) 3. 過酸化脂質の増加防止